

I. モンテヴェルディ：「愛する女の墓に流す恋人の涙」

Claudio Monteverdi: *Lagrime d'amante al sepolcro dell'amata**Prima Parte: Incenerite spoglie*

1. 灰となった亡骸よ

Seconda Parte: Ditelo o fiumi e voi

2. 語れ河よ おまえたちよ

Terza Parte: Dara la notte il sol

3. 夜には光をたたえ

Quarta Parte: Ma te raccoglie

4. されど汝をだきあげ

Quinta parte: O chiome d'or

5. おお 金の髪

Sesta et ultima Parte: Dunque amate reliquie

6. さて 愛する女の遺骸よ

II. ジェズアルド：「聖週間のための応唱集」聖土曜日より

Carlo Gesualdo: *Tenebrae Responsoria Sabbati Sancti* (excerpts)*Jerusalem, surge (Resp.2 in Noct.1)*1. エルサレムよ、立ち上がり
(第1夜 第2応唱)*Plange quasi virgo (Resp.3 in Noct.1)*

2. 娘のように嘆け (第1夜 第3応唱)

休憩

III. ブリテン：「五つの花の歌」 作品47

Benjamin Britten: *Five flower songs, Op. 47**To daffodils*

1. 水仙に寄せて

The succession of the four sweet months

2. 甘美な四つの月の移ろい

Marsh flowers

3. 沼地の花

The evening primrose

4. 宵待草

Ballad of green broom

5. 緑のほうき草のバラッド

IV. ブラームス：「ジプシーの歌」 作品103

Johannes Brahms: *Zigeunerlieder, Op. 103**He, Zigeuner, greife in die Saiten*

1. さあジプシーよ、弦をかき鳴らせ

Hochgetürmte Rimaflut

2. 高く波立つリマの流れよ

Wifßt ihr, wann mein Kindchen

3. 知っているかい、いつ僕のあの娘が

Lieber Gott, du weißt

4. 神様、ご存じでしょう

Brauner Bursche führt zum Tanze

5. 日焼けした若者が踊りに誘う

Röslein dreie in der Reihe

6. 可愛いバラが三つ並んで

Kommt dir manchmal in den Sinn

7. 時々は思い出してください

Horch, der Wind klagt in den Zweigen

8. お聞き、風が梢で嘆いている

Weit und breit schaut niemand mich an

9. 誰ひとり私を見てなどいない

Mond verhüllt sein Angesicht

10. 月さえ陰ってしまうが

Rote Abendwolken ziehn am Firmament

11. 赤い夕焼雲が空を流れていく

指揮：齋藤友香理

ピアノ（IV）：杉本直登

合唱：クール・プリエール



I. モンテヴェルディ：「愛する女の墓に流す恋人の涙」

本日、冒頭で演奏するのは、16世紀から17世紀にかけてイタリアで活躍した大作曲家、クラウディオ・モンテヴェルディによる連作マドリガーレ「愛する女の墓に流す恋人の涙」である。1567年、ヴァイオリンの街としても有名なクレモナで生まれたモンテヴェルディは、クレモナ大聖堂の楽長インジェニエーリのもとで学び、15歳で最初の作品「3声のモテット集」を出版するなど早くからその音楽的才能を認められた。1590年頃にはマントヴァに移りゴンザーガ家のもとで歌手及びヴィオール奏者として仕え、1602年には宫廷楽長に就任。1613年からはヴェネチアのサン・マルコ教会楽長となり、その後30年の後半生をヴェネチアで過ごした。ルネサンス期からバロック期への過渡期に活動した彼の作風は時代とともに大きな変化を遂げている。劇的な表現を追求するために、伝統的なポリフォニー（多声）による音楽様式を脱し、半音階的書法や不協和音、さらに器楽伴奏を取り入れた新しい作曲技法〈第二の作法〉を打ち出し、また16世紀末に誕生したオペラ様式を大きく発展させた功績は高く評価されている。特筆すべきはライフワークとして取り組んだマドリガーレ（イタリア発祥の世俗的多声歌曲）で、20歳のときに出版された第1巻から死後に出版された第9巻まで、50年に及ぶモンテヴェルディの作風の変遷を見ることができる。

「愛する女の墓に流す恋人の涙」は、マントヴァでの宫廷楽長時代後期に作曲され、1614年に出版された「マドリガーレ集第6巻」に収められている。オペラ「オルフェオ」の成功等により既に名声を獲得していたモンテヴェルディであったが、宫廷の給料の不払いもあり経済的に苦しい生活を強いられるなか、1607年秋に妻のクラウディアが2人の幼い息子たちを遺して他界。さらに翌1608年3月には、彼の家に寄宿していた歌手カテリーナ・マルティネッリが天然痘により18歳の若さで急死するという悲劇に見舞われた。寵愛していた歌姫カテリーナを失い悲しみに暮れたマントヴァ公ヴィンченツィオ・ゴンザーガは、彼女を記念して詩人アニエッリに作らせた6行6連詩をもとにモンテヴェルディに作曲を依頼したのである。詩の内容は、恋人（コリンナ）を失った羊飼い（グラウコス）の哀歌であり、ルネサンス様式の洗練されたマドリガーレとなっているが、言葉を中心とした音楽作りによるドラマチックな表現が各所にみられる。第1曲「灰となった亡骸よ」では、悲しみに打ちひしがれたグラウコスの嘆きの声が聴き手の心を揺さぶり、第6曲「さて愛する女の遺骸よ」では、コリンナの名を高らかに呼ぶ2声の掛け合いが情感豊かにクライマックスを盛り上げる。最後は、亡き恋人の天での安息とグラウコスの救いへの祈りで全曲が閉じられるが、愛妻クラウディアに続き娘同様に慈しんでいたであろうカテリーナを亡くしたモンテヴェルディの悲哀までも静かに伝わってくるようである。

（中島 尚子）

II. ジェズアルド：「聖週間のための応唱集」聖土曜日より

第2ステージは、モンテヴェルディと同時代で同じイタリアのカルロ・ジェズアルドの「聖週間のための応唱集」から聖土曜日の第2曲、第3曲を演奏する。プリエールでは、1994年と'97年に抜粋でとりあげている。この曲集は、キリスト受難をテキストとし、復活祭前の聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日に、深夜から未明にかけて行われる礼拝（朝課という）のための宗教曲集である。この礼拝は、「テネブレ（暗闇のこと）」とも呼ばれ、古今の名曲があることで知られる。ジェズアルドの最晩年1611年に出版されたこの曲集は、彼の代表作であるマドリガーレ集と比べると、不協和音、半音階進行、飛躍した転調など、その独特で過激な表現は控えめとなっているが、その表情に彼の深い嘆きと懺悔、高位聖職者一族としての贖罪の祈りが加わり、彼の数少ない宗教作品として孤高の名曲といえる。

彼の特異な音楽表現は、彼の数奇な人生と切っても切れないだろう。カルロ・ジェズアルドは、1566年、ナポリ王国の有力公爵ヴェノーザ家の次男として誕生。母はローマ教皇ピウス4世の姪、叔父は同じくピウス4世の甥でミラノ大司教という、超名門の貴族、聖職者一族だった。彼は高位の聖職者になるべく、ナポリで育てられ優れた音楽の才を示したが、1584年兄が急逝し、唯一の跡継ぎとなって人生は一転する。彼は、1586年、父方の従姉マリアと結婚。彼女は、類まれな美貌で、当時26歳、3度目の結婚だったが、ほどなく不倫に走る。1590年深夜、カルロは従者3人を連れ、妻と不倫相手の貴族を殺害した。当時この種の殺人沙汰はまもあり、ヴェノーザ公の彼が捕らえられることはなかったが、ナポリの詩人タッソが採り上げるなど、世情を騒がすこととなった。

復讐を恐れた彼は、ナポリ近郊ジェズアルド村の自らの居城に引きこもり、作曲に没頭した。その1年後、ヴェネツィア隣の公国フェラーラに赴き、1594年、フェラーラ公エステ家のエレオノーラと再婚した。エステ家の宮廷には屈指の文化人が集っており、彼は大いに触発されて、最初のマドリガーレ集を出版した。その後ジェズアルドに戻った彼は、そこで作曲に励み、音楽家や歌手を呼び寄せ、自作品を演奏させたが、めったに居城を離れず孤独に中にいた。その作曲技法は次第に先鋭化し、自らの作詞で「死」や「苦悩」を表現した、最も有名なマドリガーレ集第5巻と第6巻は、この時期の1611年に出版された。同じ頃、再婚後の息子の死、一方で、ミラノ大司教だった叔父の列聖などが重なり、贖罪の念にかられるなかで、この「聖週間のための応唱集」が出版された。やがて、身内や村民を虐待したり、鞭で自虐するなど、うつ病が悪化し、1613年に没する。

そして、残虐性と被虐性、人生の過誤と惨劇を表現した彼の作品は、長く音楽の表舞台から消えることになる。作曲家として再発見されたのは、ストラヴィンスキーがジェズアルドを高く評価した、20世紀になってからである。（石橋 孝一）

III. ブリテン：「五つの花の歌」 作品47

第3ステージでは、20世紀を代表する作曲家の一人、英国のベンジャミン・ブリテン（1913-76）の「五つの花の歌」（Five flower songs）を演奏する。この曲はブリテンが1950年、銀婚式（結婚25周年）を迎えた慈善家で園芸愛好家のレナード、ドロシー・エルムハースト夫妻へのプレゼントとして作曲した珠玉の無伴奏混声合唱曲で、花々をモチーフとする五つの曲から成る。初演は同年7月23日で、夫妻が英南西部デボン州に所有する庭園付き邸宅の屋外で、作曲家グスターヴ・ホルストの娘イモジエン（指揮者兼音楽学者）が、学生コーラスを指揮して披露した。

第1曲「水仙に寄せて」では、人生の短さや儂さが、短命の水仙に託す形で、叙情的に表現される。前半はソプラノとベース、アルトとテナーがそれぞれ対となって主旋律を繰り返し、中間部からは上部3声の和音を支える形でベースが主旋律を奏でる。第2曲「甘美な四つの月の移ろい」ではソプラノが4月、アルトが5月、テナーが6月、ベースが7月と、順々に各月の魅力をポリフォニックに歌い上げる。「7月が最高」なのは英国ならではの季節感と言える。この曲に特定の花は登場しない。第3曲「沼地の花」は、沼地に咲くさまざまな花の姿、かたちが「ぬるぬるした」「色あせた」などといった陰湿で不気味な言葉で描かれる。第4曲「宵待草」では一転、口長調の甘美な旋律とハーモニーで、夜にしか輝けない宵待草（月見草）の纖細さが表現される。第5曲「緑のほうき草のバラッド」は18世紀ごろの民謡をもとにしており、いわばできの悪い息子の成功物語。変拍子を交えた8分の6拍子中心のリズムでユーモラスに進行する。各パートソロの「語り」を支える他声部のリズミカルな和音は、ギターまたはリュートを模したものとされ、コーダでは、各声部が何度も繰り返してきた「緑のほうき草（日本名ではエニシダ）」を一気に炸裂させる。

ブリテンは英東部サフォーク州の生まれ。英王立音楽院を卒業後、政府郵政局でドキュメンタリー映画の音楽を担当。オペラ「ピーター・グライムズ」（1945）や「青少年のための管弦楽入門」（'46）、「戦争レクイエム」（'61）のほか、合唱曲「聖セシリア贊歌」（'42）、「キャロルの祭典」（'43）などを作曲した。反戦主義者としても知られる。テノール歌手のピーター・ピアーズは生涯のパートナーで、2人で欧米を旅して回った。'56年に来日し、能や歌舞伎、雅楽の世界に接した。ブリテンが笙（しょう）を手にして演奏を試みる写真も残っている。プリエールは2001年と2014年の定演で、ブリテンの「聖セシリア贊歌」を演奏したが、「五つの花の歌」は今回が初めて。齋藤先生は2週間後には「戦争レクイエム」の小オケ指揮を担当なさる予定で、本日は、ブリテンづく齋藤先生が紡ぎ出す世界をホールいっぱいに開花させたい。（宮脇 英朗）

IV. ブラームス：「ジプシーの歌」 作品103

演奏会の最後にお届けするのは、ヨハネス・ブラームス（1833-97）の「ジプシーの歌」作品103である。ブラームスは、交響曲、室内楽曲、ピアノ曲、声楽曲など幅広い分野で多数の楽曲を残した。その特徴は、古典的な形式美と重厚な構築性とともに、内面的で深い情感を湛えた抒情性を合わせ持つところにある。ブラームスの生涯は、クララ・シューマンはじめ多くの女性音楽家との深い交流に彩られ、今回の「ジプシーの歌」にもうかがえるように、その音楽の底流には「愛の憧れ」が流れていると言われる。

「ジプシーの歌」は1887年、ブラームス54歳の円熟期に作曲されたもので、もともと声楽四重奏とピアノのために書かれ、のちに独唱用にも編曲されている。歌詞は、ハンガリーの民謡集を友人の商人で詩人でもあるフーゴ・コンラートがドイツ語訳したものである。ブラームスは20歳のとき、ピアニストとしてハンガリー出身のヴァイオリニストのレーメニと演奏旅行に出かけ、ハンガリー音楽に強い関心を抱くようになった。その影響は、ハンガリー舞曲同様、この作品にも色濃く表れている。初演は1888年10月ベルリンで行われたが、それ以前に私的な初演が友人たちのサークルで行われた。その時のテノール、グスタフ・ワルターは、ブラームスの歌曲の普及に尽力した優れた歌い手で、ジプシーの歌でテノール声部が重視されているのは彼の抒情的な声を生かそうとしたからとされている。

全11曲すべて男女の愛の歌で、4分の2拍子が貫かれる中、リズムの躍動感、情熱的な旋律、そして時に哀愁を帯びた表現が織り込まれ、民族音楽の要素とブラームス的な構築美と抒情性が融合している。ピアノ伴奏も単なる和声の支えではなく、合唱と対話するように活躍する。

第1曲では不実な娘へのジプシーの恋人の嘆きを弦に乗せて、第2曲では失われた愛への嘆きを高く波立つ河の流れに見立てて、情熱的に歌い上げる。一転して、第3曲は若い恋人たちの甘美な愛を、第4曲は若い娘の切ない愛の心情を、明るく軽やかに歌う。さらに、第5曲は若者が誘った娘とジプシーの踊りを楽しむ様子をリズミックに、第6曲は愛を求める喜びを軽快なテンポで歌う。ここで情景が変わり、第7曲は、離れている恋人への愛を静かな祈りのような旋律に抒情を込め、第8曲では、楽しい思い出にもかかわらず別れのときが迫る心情を切々と、歌う。第9曲は、誰も見向きをしてくれない孤独と疎外感を情熱的に、第10曲は、月が雲に隠れる情景を通して別れと悲しみを抒情的に、そして終曲の第11曲で、赤い夕焼け雲に愛の憧れを込めて歌い上げ、全曲を締めくくる。

プリエールの定期演奏会でこの作品を取り上げるのは今回が4回目で、2013年以来12年ぶりの演奏となる。今回は、齋藤先生ならではの愛の歌の世界を、杉本先生の重厚なピアノとともに、ご堪能いただければ幸いである。（横尾 英博）



Photo by Kana Tarumi

齋藤 友香理 (指揮)

SAITO Yukari

東京都出身。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学ピアノ科卒業後、同大学の科目履修生『指揮』に在籍し、黒岩英臣、高関健、梅田俊明の各氏に師事した。2009年からはローム ミュージック ファンデーションの指揮セミナーで小澤征爾、湯浅勇治、三ツ石潤司各氏の指導を受ける。その後小澤征爾氏により指揮研修生に選ばれ、特別レッスンを受講する。そして2010年9月にサイトウ・キネン・フェスティバル松本(現セイジ・オザワ松本フェスティバル)で青少年のためのオペラ「ヘンゼルとグレーテル」を指揮し、オペラデビューを果たした。また同年からは一年間、公益財団法人 新日鉄住金文化財団「指揮研究員」として紀尾井ホール室内管弦楽団および東京フィルハーモニー交響楽団で研鑽を積む。

2013年9月からはドイツのドレスデンに拠点を移し、ドレスデン音楽大学大学院指揮科に在籍、G.C.ザンドマン教授に師事し、修了。その間、ドレスデン音楽祭総監督であるヤン・フォーグラーの推薦によりモーリッツブルグ音楽祭に招かれ、ハインリヒ・シフのアシスタント指揮者を務める。2015年、第54回ブザンソン国際指揮者コンクールで聴衆賞とオーケストラ賞を同時受賞。2016年にはリール国立管弦楽団を指揮し欧州デビューを果たす。また2017年には、ウィーンのトーンキュンストラー管弦楽団との公演において、ダニエル・オッテンザマーと共に演。2018年5~7月にはバイエルン州立歌劇場で上演されたワーグナー「パルジファル」で、音楽監督キリル・ペトレンコのアシスタントを務めた。これまでに読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、兵庫県立芸術文化センター管弦楽団、九州交響楽団を指揮。

昨年の定期演奏会から、クール・プリエールの常任指揮者として、当団を指揮。



Photo by Kana Tarumi



(2024年定期演奏会)

杉本 直登
(ピアノ)

SUGIMOTO Naoto

洗足学園音楽大学ピアノコースを首席で卒業。日本演奏家コンクール第1位ならびにグランプリ。KOBE国際音楽コンクール最優秀賞。ベーテン音楽コンクール第1位ならびにグランプリ。さくらぴあ新人コンクール、第1位。ピティナ・ピアノコンペティション特級ファイナリスト。2023年カントゥ国際ピアノコンクール(伊)第2位。ほか多くのコンクールで入賞する。ルーマニア国立バカウ・フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団、岡山フィルハーモニック管弦楽団、ウラディーミル・アシュケナージ氏等と共に演。ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン等の音楽祭に出演。ソロの他合唱、声楽家との共演も積極的に行い、リサイタル、音楽祭等様々な演奏会に出演。門下生から多数のコンクール入賞者を輩出し、ショパン国際ピアノコンクールin Asia、ピティナ等より優秀指導者賞、幼児指導者賞を授与される。ピティナ・ピアノコンペティション、日本クラシック音楽コンクール、予選、本選、全国大会審査員。全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)正会員。合唱指導として参加した合唱団は『東京国際合唱コンクール』A1、A2部門金賞、『東京春のコーラスコンテスト』ジュニアの部で金賞を受賞。